大沼法龍著

魂のささやき

敬行寺発行

魂のささやき　目次

1　間ぬるい信仰とは違うぞ……一
2　行き着く迄進め……四
3　疑いなき本願に……二
4　謗法闡提廻心皆往……二
5　十方世界が私のもの……一六
6　異　安　心……一七
7　攻撃されし親鸞上人……二〇
8　攻撃を受けし法龍……二三
9　難信の法……二六
10　母　よ　り……三三
11　右　返　事……三五
12　親が泣くぞ……四三
13　机上の講釈……四四
14　六字が成り立たん……四八
15　聞かん儘と聞く儘……四八
16　凡　夫　一　杯……四九

17 二度びつくり……五一
18 眞の幸福……五二
19 生かす念力……五三
20 佛様を燒いた……五四
21 進まずには居られない……五五
22 法と討死……五六
23 八幡の敎田から耕さねば……五七
24 三度の食事よりも……五八
25 凡夫じゃ參れんぞ……五九
26 拜みます……六〇
27 何故眞劍になれないか……六二
28 御恩報謝……六三
29 睡入られない……六四
30 信の前後に……六六
31 敎えぶり……六六
32 名乘を擧げよ……六七
33 何でもいけない……六七
34 唯じやぞーの一言……六八
35 十六日夜の月……七〇
36 八万四千……七一

37 機を見るものが……七四
38 相手次第で自在になる……七七
39 乙女の眞心……七八
40 私は惡者です……八一
41 全滅する迄……八三
42 誰の罪か……八六
43 機を見れば手間が掛る……八九
44 門出の用意は出來たか……九二
45 調熟の光明と攝取の光明……九五
46 信仰の妥協はせぬ……九八
47 一念の決勝点……一〇
48 生花信心……一一六
49 あんな六ヶ敷い事を言ふと人が迷ふ……一二五
50 浮いてよし沈んでよし……一三七
51 当らず障らずの安心……一四〇
52 お寺やお佛前の信仰……一四四
53 道俗何れの信仰が本当か……一五〇
54 信後の眞似をするな……一六二
55 廣大難思の慶心……一八三
56 判らん奴じやと判るまで……一九〇

57 難中之難……一九四
58 判る人には判る……二〇二
59 何れにも利がある……二一三
60 素直の柄か……二二九
61 こうまで丁寧に……二四二
62 空論と実地……二四六
63 獅子身中の虫……二五二
64 知識選びをする……二五八

はしがき

「四面楚歌の声すれども屈せざるは是れ男子、信じて行えば天下一人と雖も強し」とは杉浦重剛氏が日露の講和談判に行かれし小村外相に打電された金言である、勇ましいではないか尊いではないか。八方から攻撃は蒙ろうとも屈せないのは偉大なる宗教家である。信じて怒濤を乗切る者は不思議の体験者である。宗祖聖人様は無常の嵐に驚いて九歳の春に出家し給いしより二十ヶ年の求道は名誉を得る爲でもなければ地位を獲る爲でもない、未來永劫の苦患を遁れて永生の樂果を得ん爲であつた、三諦圓融の道理を学べば学ぶ程、一念三千の理を究むれば究むる程、眞理に近こうとして却つて遠かる自己の醜さに驚き寢食を忘れて求道せずには居られなかつたのである。

重ねて言う、眞剣に求道さるゝ聖人様には名利もなければ毀譽褒貶もないのだ、唯苦惱の心が無限に動き、散乱の渦が無盡に湧いて來るのみだ、見れば見る程罪惡深

重、考えれば考うる程煩惱熾盛、三業の所修一念一刹那も罪惡に非ざることなく業報ならざるはないではないか、之を消し得る宗教は何処に有る、これを救い得る教は何処に有ると号泣された聖人様には八万四千の法門は画餅に等しく、現在の地獄を遁れ切らずして永劫の樂果がどうして得られよう、現在満足し得ずして無明の大夜をどうして切拔ける事が出來よう、教えて呉れる知識はないか、導いて呉れる大德はないかと猛進された姿が「設滿大千火必過要聞法」の心ではないか、遂に明師法然上人様に逢い一座の法話で他力不思議を受得し給いしは必墮無間の業魂に驚き、三定死の巖頭に立ち、自力策勵の無効を覚知され「すかされまいらせて地獄に墮ちたりとも更に後悔すべからず候」まで調熟の光明に照し貫かれて有ればこそ、我能く汝を護らんの声なき無限の大慈悲を諦得して「五劫思惟の願をよく〳〵案ずれば親鸞一人が爲なりけり」と叫ばずには居られなかつたのである。

仮令十方の有情が罵倒しようとも、諸宗挙つて攻撃しようとも門内の僧侶から背師

自立と悪口言われようとも救われたが証據ではないか助かつたが実地ではないか、と声ほがらかに化土卷には

竊以聖道諸教行証久廃浄土眞宗証道今盛　然諸寺釈門昏レ教兮不レ知二眞仮門戸ニ洛都儒林迷レ行兮無レ辨二邪正道路ニ　と宣い、御和讃には

念佛成佛是眞宗　万行諸善これ仮門
権実眞仮をわかずして　自然の浄土をえぞしらぬ
聖道権仮の方便に　衆生ひさしくとどまりて
諸有に流轉の身とぞなる　悲願の一乘帰命せよ

と攻撃罵倒の其中に一誠に佛恩の深重なるを念じて人倫の弄言を恥ぢず」と血みどろの求道あればこそ、極悪最下の自覚が有ればこそ、他力不思議の体驗が有ればこそ遠流に処せられながらも微笑む事が出來たのではないか。

喩えば或偉人の傳記を書こうとする時、本人の成功せる後の幸福のみを記せるもの

は其人の全貌を顯わすものでない、成功の頂上を究むる者は坂路の嶮岨を攀じた人にのみ有り得るのだ、聖人樣の二十ヶ年の難行苦行を拔きにしては他力不思議は意味を爲さないのだ。仰ぎ願くは一切の道俗よ、我執を離れ機執を去り、如實に法を求めなければ自己の無能は判らないぞ、眞劍に切込まなければ自己の本尊は知れないぞ、深刻に進まなければ自己の闡提に氣がつかないぞ、實地に味わなければ自己の逆謗は見えないぞ、かゝる實機を拔きにして死後の往生を夢見て居るのは「宗教は阿片なり」の批評も當然ではないか、手前の川が渡れなければ先の川は渡れない、現在の心の往生、攝取不捨、平生業成、即得往生の出來て居ない人に死後の往生のあらるゝ筈がない。速かに他力不思議の行信を諦得し無限の大慈を讃えつゝ無蓋の大悲を仰ぎつつ感謝法悅の生活に入らなければ人世に生れさゝれた甲斐がないではないか。

此書を名けて「魂のささやき」とは妥協したがる感情、今したがる形の法龍を久遠の御親に逢うた心の法龍が叱正して居る書物であるから、同時にまた愚図々々求めて居らるゝ人を見ればじつとして居られないから言葉が荒いのです、お赦し下さい。